

環境ベンチャー、コンティグ・アイ

バイオエタノール事業に力

環境ベンチャーのコンティグ・アイ(岐阜市正木、鈴木繁三社長)は、バイオエタノール事業に注力する。セルロースを含む植物性廃棄物を自社開発の酵素で糖化、発酵、蒸留して、燃料となるバイオエタノールにするノウハウを提供する。

燃料化ノウハウを提供

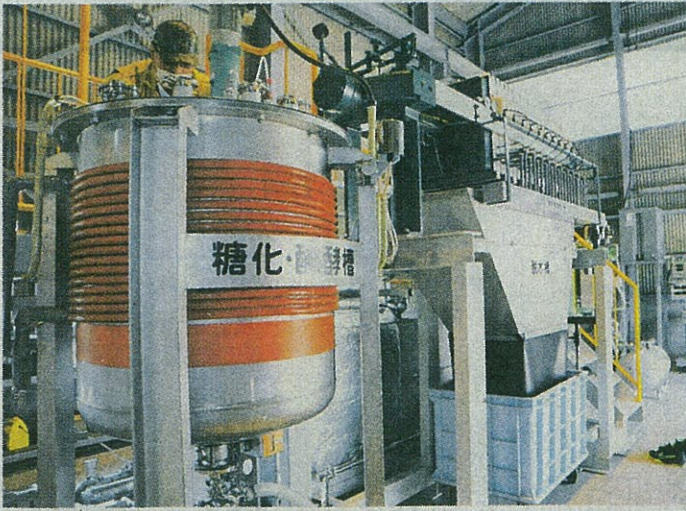
同社は2003年設立。刈り取ったゴルフ場の芝、木材、紙、食を基にセルロースを糖 品残さなど、従来は産化する酵素を開発し、業廃棄物として処理さ原料にはトウモロコシ

やサトウキビが多く使われているが、同社の酵素を使用した場合、芝などでも糖化効率はさほど変わらないという。セルロースが多い紙では1トから約45

0キロのバイオエタノールが製造可能。バイオエタノールになるまで約5日間かかる。同社は製造には携わらず、顧客企業にノウハウと製造プラントの設計、運用に必要な酵素を提供するビジネスモデルを採用している。顧客は食品・飲料品メーカーやゴルフ場、種苗業など。

こうしたビジネスモデルは08年度に経済産業省の「大学発ベンチャーに関する基礎調査」で「光る大学発ベンチャー20選」に選ばれたほか、今年2月に

県内地銀などによるベラ羽島市に移転した。鈴木社長は「東日本大震災もあり、地域でエネルギーを作り出す循環型社会への転換が進むだろう。バイオエタノールの応用先、利用方法の拡大を図りたい」と話している。



植物性廃棄物からバイオエタノールを製造する実証プラント―羽島市下中町城屋敷